

戦時下の暮らし(その3)

村内の学童も援農に

農村である端野村の学童(国民学校の児童)たちは、当時は、平時にあっても、家業の農作業を手伝っていましたが、戦時下にあつては学校で勤労報国隊(のちに学徒隊)を編成し援農に出動しました。

端野村における学童の援農がいつから始まったのかは定かではありませんが、「緋牛内国民学校沿革史」に、
昭和一六年七月三日、食糧・飼料増産運動ニアタリ、労力援助ノタメ本日ヨリ一〇日間休業
とあることから、おおよそこの頃から学童の援農がはじめられたものと思われます。

また、昭和一八年(一九四三)二月「国民学校ニ関スル戦時非常措置」によつて、国民学校では高等科児童は年間六〇日間の勤労動員のほか、男子は初歩の国防訓練、女子は保育や救護訓練を行う事が義務づけられました。昭和一九年の「川向国民学校日誌」に記載の援農作業について拾つてみますと、二三日の援農に出動し、このほか農繁休業日を加えると実に七五日にも達し、翌二〇年には終戦になつてもなお援農作業に出動し、食糧増産に励んだことが伺えます。

参考に、左表のとおり一九年度の援農作業状況を記します。この農繁休業は戦後数年間継続されました。

期間	内容
5月22日～5月28日	初等科四年生以上農繁休業
5月31日～6月2日	〃
6月27日～7月13日	初等科五年生以上地区農家の援農
7月26日(1日間)	五年生以上農繁休業
7月31日～8月26日	夏季授業を行はざる日、児童は自家農作業に従事
10月9日～10月10日	初等科五年生以上農繁休業
10月16日～10月25日	初等科五年生以上援農
11月11日～11月18日	高等科児童農繁休業
11月22日～11月25日	初等科五年生以上農繁休業

▲端野村学童の援農作業状況

この農兵隊には全道各地から三二一人の青少年が入隊し、端野村からも二二人が入隊しました。

農兵隊の訓練は、一か月の基礎訓練(公民修身科、農事学科、普通学科、作業、教練・武道)を受け、その後地方訓練を受けました。この地方訓練は、中隊ごとあるいは小隊ごとに移動し訓練作業にあたりました。端野村からの二二人は、第一中隊第二小隊で、五月一五日網走支庁管内の小清水村を皮切りに東旭川、端野、生田原、東瀬棚、比布、苦小牧、さらに本州(千葉県、群馬県、三重県)などの各市町村で訓練を終え、翌二〇年三月中旬に帰省しました。

歴史や習慣、自然環境が異なる地域での地方訓練で様々な体験をし、農兵隊に入隊された方々は、戦後の端野農業の復興と発展に大きな役割を担い、今日の端野農業の基盤を築きました。

この農兵隊に入隊した、二区在住の西川栄松氏から寄せられた「少年農兵隊の思い出」が、端野小史第四集(戦時下の村びと)に記載されていますが、この思い出の最後に、
あれからやがて半世紀、いま平和の中で当時を思うとき、つくづく戦争の空しさが胸を突き、平和の尊さが心を打ちます。私たち体験者は尊い平和を永く永く後世に継がなければならぬと思います。

と、記されています。

なお、この農兵隊は、翌二〇年三月にも編成され、端野村から一六人が入隊しましたが、その記録は定かではありません。

青少年農兵隊

昭和一八年一二月、農業労働力確保のため、戦時農業要員を指定し、徴用除外(兵役免除)とする「食糧自給態勢強化対策要綱」が決定され、これに基づき翌一九年四月「青少年農兵隊北海道大隊」が編成され、帯広市啓北国民学校で入所式が行われました。

その他の勤労隊(徴用)

飛行場整地報国隊

昭和十三年(一九三八)一〇月、端野村青年勤労報国隊が美幌海軍航空隊(現陸上自衛隊美幌駐屯地一帯)の滑走路整地作業に出動しました。

隊員は、青年学校長が推薦した二〇人で、このことについて「昭和十三年端野村事務報告書」に、

一〇月一六日ヨリ二七日ニ至ル一二日間M工事ニ勞力奉仕ノ者村内青年三〇名ヲ派遣セシメタリと記されています。



▲「青年報国隊」昭和十三年
昭和十三年十月十六日から二十七日まで端野村青年報国隊員三十名が美幌飛行場建設工事に出動した作業は朝五時起床、夜は七時までリヤカーを用いて土砂の運搬作業が強行された。

イトムカ鉱山

昭和一八年(一九四三)、端野村から五人の青年が、一〇月一四日から十二月二四日まで

の間、留辺蘂のイトムカ野村鉱業所に徴用されました。

その他、雄別炭鉱など道内の炭鉱に徴用されたということが語り継がれていますが、その詳細については不明です。

*前号「戦時下の暮らし(その2)」で、秋田師範学校の学徒動員端野援農隊の五〇周年を記念し「訪問記念誌」を発刊したと記述しましたが、この記念誌に援農隊の一員として奉仕された高橋武三氏(一区で援農、秋田県大曲市在住)が寄稿された「あれからもはや五〇年」が、当時の学徒動員と暮らしの一端を垣間見ることができまので転載させていただきます。

あれからもはや五〇年

戦雲暗き昭和一九年、師範に入学したものの、学徒動員、木枯らしすさぶ八戸で、トーチカ構築砂利作業。明くれば決戦二〇年、今度は東京大森の軍需工場鉄作り、電気炉圧延特殊鋼、おまけの果てに大空襲、命からがら逃げ帰る。

ほっと、一息つかの間に又もくたるや動員令。次はいずこへ行くのやら、トランク一つひっさげて、青森港から船の旅、津軽海峡初夏の風、函館港から汽車の旅、道南道中道東と、たどりついたは端野村。さすが豊けき北海道、空襲もなしパラダイス、仕事はつらいが田園の恵みいっぱい、花いっぱい。

家にはやさしい老夫婦、戦地の夫待つ妻の、語るも涙聞かぬ涙、麦のまじりし飯なれど、配給育ちの我らには、何にもまざる有難さ。

朝は馬車の手綱とり、シーシーオーオーバアイキ、どこまで続くビート畑、半月型の草刈鎌、

右手左手持ちかえて、腰の痛みも忘れぬ、寒さにふるえた稲田植。

夏はカボチャの花受粉、ハツカ畑の草むしり、四つん這いの強行軍、小屋でいたたく昼食の身欠みがき練にしんの味のよさ、昼寝の夢は故郷へ。

亜麻抜き亜麻打ちたたき台、麦の脱穀たたき棒、こもり茂るトウキビの林に迷い日が暮れる。

さすがたくましい道産馬、裸の馬にまたがつてさっそうと駆ける気持ち良さ、三歳馬にコケにされ振り落とされし草の上。

忘れもしない終戦のニュースを聞いて集まりぬ。

鎮守の神に手を合わせ悲憤慷慨ただ涙。

秋風涼しい北海道、ジャガイモ掘りの好ましき、大豆にささげ穀類の稔りの山の嬉しさよ、なによりつらいハツカ刈り、東につらねてゆさゆさとか

ついで運ぶあの重さ。
戦地の主人も復員し、一家揃って団らんの夕飯
困むなごやかさ、やがて憩いの村祭り厳しい冬への気もせわし。

秋風寒き端野村、思い出深き地を後に、別れの時を迎えける。
あれからすでに五〇年、再び端野を訪れば、空の青さや山の色、常呂の川も変わらねど、子孫曾孫の代になり馬の姿も消え失せて、トラクターにコンバイン、まこと浦島物語、見事な新生端野町、思い懐かし青春の幻の夢よみがえる。端野町の皆様よ、今日のご恩義忘れません。内地に來られるその時は、秋田で再び会いましょう。どうぞ皆様その日まで明るく達者で暮らしましょう。

端野町よ永遠なれ、端野町に幸せあれ、端野町に祝福あれ。(原文のまま)
と、記されています。